

禅の友

Zen no Tomo

12

December 2025





ご本山だより
大本山永平寺

【成道会式と梅花講】
じょうどう えしき ばいかこう

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二



十二月八日はお釈迦さまがおさとりを開かれた成道の日です。その日の午後、法堂において成道会式が厳修されます。僧俗を問わずさとり道の道を求める者たちが一堂に会し、華を供え、御明を灯し、この上ない喜びと心からの感謝の気持ちを表すのです。

この法要の中心となるのが大本山永平寺梅花講の講員の皆さまによる詠讃歌の奉詠です。仏法僧の三宝を讃え、お釈迦さまの成道を祝い、心からの祈りをささげるのです。そのお唱えと鐘の音は、肌にしみこむような寒さのなか、法堂中に響き渡ります。

実はこの二年間、筆者が大本山永平寺梅花講の皆さまの指導をさせていただいています。資料を見てみると、大本山永平寺梅花講の講設置日は昭和二十九年十二月一日となっています。そもそも梅花流が発足したのが昭和二十七年ですから、それからわずか二年で開講されたということです。まさに梅花流の歴史と共に歩んできたといっ

てもよいでしょう。講設置から七十二年果たして、現在活動をしている梅花講の中で、これほどの歴史がある講はどれほどあるのでしょうか。長年にわたる本山を支え、一仏兩祖をお慕いしてきた講員さんの梅花流詠讃歌に取り組む姿勢には、ただ感服をするばかりです。

全国の梅花講と同様、大本山永平寺梅花講も高齢化により講員数が減少し、活動の縮小を余儀なくされています。しかし、数年前に新たな講員さんが入講しました。それにより、今までとは違うことへ挑戦をする活力が生まれたのです。既存の曲に自主的にピアノ伴奏を入れてお唱えを試みたり、主旋律と低音の二部に分かれた難しい合唱の曲に取り組んだり。ベテランの講員さんも新人の講員さんも皆積極的に、前向きに活動をしています。

お釈迦さまがこのお姿をご覧になったらどれほど喜んでくださることでしょう。大本山永平寺梅花講がますます発展していくことを願って止みません。



ご本山だより 大本山總持寺

「釈迦牟尼佛、明星を見て悟道し、言つた。
「私も、命をもつものも、同時に仏道を
成しとげた。」『伝光録』 首（釈尊）章」

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二二



一年が瞬く間に終わろうとしています。日本列島は今年も異常気象などによる線状降水帯や竜巻による大きな災害に見舞われました。来年こそは災害の起こらない平穏な年となりますよう祈るばかりです。

さて、十二月はとても大切な月です。八日に成道会があり、それに先んじて一日より八日未明まで臘八摂心が修行されます。

摂心とは、心を静かにおさめて坐禅三昧に徹することです。

伝光録の中でお釈迦さまは「我と大地有情と同時に成道す」とお示しです。この「我（私）」は、お釈迦さまだけのことではありません。

お釈迦さまも、命を持つものも、過去現在未来の仏も皆この「私」から生まれて同時に成道する、そんな「私」であります。お釈迦さま自身が成道したとは言っていないのです。全ての存在は、一つでもなく、別でもないの

です。摂心に参禅辨道するものは、この時のお釈迦さまの体験を自身で体感するために真剣に坐禅に打ち込むのです。臘八摂心は、お釈迦さまが成道なさる前に七日間不眠不休の坐禅をされたことを慕って行われるものです。總持寺では日常の諸行持を休止し、提唱（講義）の時以外は午前四時から午後九時まで僧堂で坐禅に打ち込み、三食の時も坐禅堂で過ごします。

また坐禅中に疑問などが生じた時は後堂老師や単頭老師の部屋に赴き、これを問う時間もあります。特に最終日七日目は深夜まで坐禅を続けます。摂心が終わる八日未明には仏殿にて「成道会献粥諷經」が行われます。

臘八摂心は、總持寺開祖・瑩山禪師さまの『瑩山清規』によって、「臘月の長坐」として全国に広まっていた経緯がありますので、大切に修行したいと思います。

選・坊城俊樹

南瓜切る草間彌生の絵を見し日

長野県 森山 昌子

評

草間彌生の絵とは水玉やドットなどをモチーフにしたものが多い。南瓜をモチーフにした作品は有名。どれも非日常적であり、それらを出して切る南瓜の断面はどんなものになるだろう。南瓜という季節の作品としては過去に例を見ず唯一無二のもの。

秋刀魚焼く煙は沖へ逃げてゆく

鳥取県 眞山 博充

評

これは秋刀魚の句としては珍しい発想にある。普通は美味かったという句ばかり。この句は秋刀魚の無念に焦点を当てた。それは焼かれて煙りとなってまでも故郷の沖へ帰りたいのであろう。このような句もまた過去に見たこともない秀句。

◆ モノクロの無人の駅にカンナ燃ゆ

和歌山県 田崎 よし子

◆ 踊りの掌千賀の浦風かへしては

宮城県 金升 富美子

◆ 朝焼の水平線のまだ覚めぬ

三重県 荻屋 奈良美

◆ きぬぎぬの別れの頃か虫鳴けり

宮城県 石濱 徹

◆ 蜘蛛の囀の形に風の渡りたる

愛知県 松井 暁美

◆ ひとり来て母とふたりの月の宿

福岡県 嶽本 由美

◆ 虹色の蜥蜴^{とかげ}の出るや朝の垣

千葉県 甲斐 勇

◆ 孤独とは秋の夕べの一つ星

秋田県 伊藤 剛司

◆ 行き逢ひし鈴虫の音や棚田道

山口県 管 和子

◆ 夜の更けて透明となる虫の声

島根県 藤江 堯

選者吟

あの頃の僕と眺むる雲の峰

俊樹

作句小見

これは郷愁の句。私自身が小学生のころ夏休みなどは外で遊んでばかり居た。その野原の果てに有る入道雲の壮大なことは今でも忘れられない。私は東京都出身だが、昭和三十年代の夏空はビルなどもなく、山脈のような雲の峰が遙か彼方に広がっていた。

選・長澤 ちづ

エアコンの無き函館の避難所に肌で感ずる地球温暖化

北海道 加藤 智子

評

涼しい筈の北海道すら今年の夏の暑さは異常であつた。加えて線状降水帯に抛る豪雨や、地震による津波など避難所への待避が必要なきことが多かつた。その避難所にエアコン設備のないことを嘆く作者は地球温暖化を肌身で感じている。

弟よ愛車に実家のTELナンバーふるさと恋いつつ君は生きしか

大阪府 日本 美智子

評

事情があつてこれまで疎遠だつた弟さんかも知れない。車のナンバーが実家の電話番号だつたことから、その人生を推し量っている思いの深い一首である。

◆ 東京に学びはじめし孫の元へわが田の米を急ぎて送る

三重県 藤川 幸子

◆ 手のひらにカブトムシ乗せ持ち帰る幼のまなこ釘づけとなる

鳥取県 眞山 博充

◆ ガラス戸に張り付き獲物を待つ守宮やもり今宵は小ささが一匹増えて

茨城県 田口 昭子

◆ 梅雨という季ときもいつしか死語ならむ洗濯物はよく乾きおり

静岡県 杉原 民子

◆ 畑ものに灌水せんとタツ方踏みゆく畝うねのいまだ温しも

岩手県 穴戸 さとる

◆ 早朝にラジオ体操するときに庭のチチロの声ぞうれしき

島根県 宮廻 恒雄

◆ このタべくすり飲んだか確かめ合う我ら夫婦は九十半ば

兵庫県 佐伯 幸子

◆ 蔓延はびこりししろつめ草の花を摘み五歳の女孫のティアラを作る

岐阜県 丸山 正己

◆ 繁茂はさかする広葉の陰に葛の花鶉色うさぎいろ美しく揺れているなり

秋田県 高橋 カツ子

◆ 草取りてなかなか伸びない腰のまま袋を引きずる今日はここまで

神奈川県 田中 スエ子

選者誌

樹下のもとわれ蟻となり仰ぎ見る空は高くて森は深くて

ちづ

作歌小見

宮廻さんが詠う「チチロ」はこおろぎのこと、鳴き声とも響き合つて懐かしい感じがします。佐伯さんご夫妻は九十代半ばでそろって元気なご様子、結句の数字の力に圧倒される一首です。この平安がいつまでもと願わずにはいられません。